京都国立近代美術館 | The National Museum of Modern Art, Kyoto

プレス・リリース | Press Release

京都国立近代美術館所蔵作品にみる | From MoMAK Collection

京（みやこ）のくらし——二十四節気を愉しむ

Life in Kyoto — Arts in Seasonal Delight

会期：二〇二〇年七月二十三日（木・祝）—九月二十二日（火・祝）

会場：京都国立近代美術館［岡崎公園内］

開館時間：午前九時三〇分—午後六時

＊ただし毎週金曜日および八月十六日（日）は午後八時まで（いずれも入館は閉館の三〇分前まで）

休館日：毎週月曜日と八月十一日（火）

＊八月十日と九月二十一日（ともに、月・祝）は開館

主催：京都国立近代美術館、ＮＨＫ京都放送局、ＫＢＳ京都、京都新聞

観覧料：一般　一、〇〇〇円（八〇〇円）、大学生　五〇〇円（四〇〇円）

＊（　）内は前売と二〇名以上の団体料金および夜間割引（金曜日の午後五時以降）

＊本料金でコレクション展もご覧いただけます

＊高校生以下、十八歳未満、心身に障がいのある方とその付添者一名は無料

（入館の際に証明できるものをご提示ください）

＊新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間・休館日は変更になる場合があります。

ご来館前にホームページなどで最新情報をご確認ください。

www.momak.go.jp/

1-1

1-2

1-3

1-4

1-5

1-6

1-1 福田平八郎《竹》1942（昭和17）年、紙本着色／額　**1-2** 伊藤久三郎《雨、或いは感傷》1937（昭和12）年、油彩画布

1-3 野島康三《枇杷》1930（昭和5）年、ブロムオイル・プリント　**1-4** 川端龍子《佳人好在》1925（大正14）年、絹本着色／額

1-5 北沢映月《祇園会》1936（昭和11）年、絹本着色／二曲一隻屏風　**1-6** 八木一艸《均窯金魚置物》1960（昭和35）年頃、陶器・釉薬

ごあいさつ

日本では、くらしを彩る芸術の中に、巧みに自然を取り入れてきました。特に京都は、古くから、くらしと自然そして芸術が親密な関係を築いてきた街として、今も多くの人々を魅了しています。

季節の移ろいを把握する目安として、日本では二十四節気という季節の区分が用いられてきました。本展では、この二十四節気に沿って、京都のくらしに息づく自然現象や草花、生き物、祭や行事などを、当館コレクションから精選した作品によって紹介します。

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの眼を、いつも以上に、日常のくらしとそれを取り巻く自然の変化、そして芸術や文化の存在へと向けさせることになりました。本展会場を一巡することで、くらしと自然そして芸術の豊かなかかわりを体感し、激変する社会における現在の、そしてこれからの生活を改めて考えるきっかけとなれば幸いです。

二十四節気と主な出品作品

二十四節気は、一年の太陽の黄道上の動きを視黄経の十五度ごとに二十四等分して決められます。太陰太陽暦（旧暦）で季節を表すために用いられていましたが、現在でも季節の節目を示す言葉として使われています。節分（立春）を基準として、春夏秋冬と続きますが、展覧会では、開催時期にあわせて、始まりを夏としています。

夏 | SUMMER

初夏

《立夏》 五月六日頃　夏の気配が感じられる [fig.1-1]

《小満》 五月二十一日頃　すべてのものが次第にのびて天地に満ち始める [fig.1-2]

仲夏

《芒種》 六月六日頃　稲などの（芒（のぎ）のある）穀物を植える [fig.1-3]

《夏至》 六月二十一日頃　昼の長さが最も長くなる [fig.1-4]

晩夏

《小暑》 七月七日頃　暑気に入り梅雨のあけるころ [fig.1-5]

《大暑》 七月二十三日頃　夏の暑さが最も極まるころ [fig.1-6]

2-3

2-1

2-6

2-5

2-4

2-2

2-1 安井曾太郎《桃》1950（昭和25）年、油彩画布　**2-2** 松田権六《蒔絵箱「赤とんぼ」》1969（昭和44）年、木胎・金・貝／蒔絵・螺鈿
2-3 上村松園《虹を見る》1932（昭和7）年、絹本着色／二曲一双屏風　**2-4** 神坂祐吉《月象之図 硯付手箱》制作年不詳、木・漆・貝／螺鈿
2-5 香川勝廣《菊花図花瓶》明治時代、銀／打出・象嵌（金、四分一）　**2-6** 安藤緑山《柿 牙彫置物》大正～昭和初期、象牙／彫刻・着色（撮影：木村羊一）

秋 | AUTUMN

初秋
《立秋》八月七日頃　秋の気配が感じられる [fig.2-1]
《処暑》八月二十三日頃　暑さがおさまるころ [fig.2-2]

仲秋
《白露》九月八日頃　しらつゆが草に宿る [fig.2-3]
《秋分》九月二十三日頃　秋の彼岸の中日、昼夜がほぼ等しくなる [fig.2-4]

晩秋
《寒露》十月八日頃　秋が深まり野草に冷たい露がむすぶ [fig.2-5]
《霜降》十月二十三日頃　霜が降りるころ [fig.2-6]

冬 | WINTER

初冬
《立冬》十一月七日頃　冬の気配が感じられる [fig.3-1]
《小雪》十一月二十二日頃　寒くなって雨が雪になる [fig.3-2]

仲冬
《大雪》十二月七日頃　雪がいよいよ降り積もってくる [fig.3-3]
《冬至》十二月二十二日頃　昼が一年中で一番短くなる [fig.3-4]

晩冬
《小寒》一月五日頃　寒の入りで、寒気がましてくる [fig.3-5]
《大寒》一月二十日頃　冷気が極まって、最も寒さがつのる [fig.3-6]

春 | SPRING

初春
《立春》二月四日頃　寒さも峠を越え、春の気配が感じられる [fig.4-1]
《雨水》二月十九日頃　陽気がよくなり、雪や氷が溶けて水になり、雪が雨に変わる [fig.4-2]

仲春
《啓蟄》三月六日頃　冬ごもりしていた地中の虫が這い出てくる [fig.4-3]
《春分》三月二十一日頃　太陽が真東から昇って真西に沈み、昼夜がほぼ等しくなる [fig.4-4]

晩春
《清明》四月五日頃　すべてのものが生き生きとして、清らかに見える [fig.4-5]
《穀雨》四月二十日頃　穀物をうるおす春雨が降る [fig.4-6]

3-1

3-2

3-3

3-4

3-5

3-6

3-1 都路華香《白雲紅樹》1914（大正 3）年頃、絹本着色／軸　**3-2** 織田一磨《京都風景：加茂川》1925（大正 14）年、リトグラフ
3-3 堂本印象《冬朝》1932（昭和 7）年、絹本着色／額　**3-4** 稲垣稔次郎《型染壁掛「東寺の縁日」》1952（昭和 27）年頃、木綿／型染
3-5 板谷波山《朝陽磁鶴首花瓶》1938（昭和 13）年、磁器・釉薬　**3-6** 森田子龍《凍》1957（昭和 32）年頃、紙・パネル／墨

関連展示など

●二〇二〇年度 第二回コレクション展

会期：二〇二〇年七月二十二日（水）～十月四日（日）
会場：京都国立近代美術館 4Fコレクション・ギャラリー
「京（みやこ）のくらし――二十四節気を愉しむ」展のスピンオフとして、当館が所蔵する東松照明による写真シリーズ「京まんだら」全75点を展示します。
東松照明（1930-2012）：名古屋市生まれ。岩波写真文庫のスタッフを経て、1950年代に写真家としての活動を始める。洗練された構図と鮮烈な色彩を持ちつつも、戦後日本および日本人のあり方を深く問いかけるその作品は、後進に大きな影響を与え、今なお世界で高く評価されている。

●『京都国立近代美術館所蔵作品にみる 京（みやこ）のくらし――二十四節気を愉しむ』

著者：京都国立近代美術館＋筧菜奈子
翻訳：Beth Cary
デザイン：木村幸央
発行所：青幻舎
発行予定日：二〇二〇年七月二〇日
予定販売価格：三、〇〇〇円（B5変型判・約240頁）

本展の主題に合わせて刊行する書籍です。会場の都合などにより展覧会で実際に展示できない作品を含む約320点の作品を一挙紹介。各節気や代表的な作品の解説などを含む充実した内容を、日英バイリンガルでお届けします。

そのほかの関連イベントについては、そのつど当館ホームページなどでご案内します。

お問合せ先

「京のくらし――二十四節気を愉しむ」広報事務局
Nene Laco.（ネネラコ） 担当：和田
531-0072 大阪市北区豊崎 3-15-5 TKビル
TEL. 06-6225-7885 | FAX. 06-7635-7587 | E-MAIL. art-pr@neneLaco.com

4-4

4-1

4-2

4-6

4-5

4-3

4-1 神阪松濤《椿》明治末、絹本着色／額　**4-2** 森口華弘《振袖「梅林」》1964（昭和39）年、縮緬／友禅
4-3 山脇洋二《蜥蜴文硯箱》1947（昭和22）年、銀／鍛造・彫金　**4-4** 並河靖之《桜蝶図平皿》明治時代、金属・釉薬／有線七宝
4-5 竹内栖鳳《おぼろ月》1928（昭和3）年、紙本着色／軸　**4-6** 五代清水六兵衛《音羽焼牡丹唐草花瓶》1927（昭和2）年、陶器・釉薬